

ハンドボール競技におけるスローのバリエーションについての運動学的考察  
—ポストシュートに着目して—

竹村啓汰 (1508045)

<序論>

研究動機・研究目的・研究方法

ハンドボールは、ゴールキーパーを含む7人のプレイヤーで構成され、2チームに分かれて定められた競技時間内により多くの得点をあげたチームが勝者となる。そして、得点をとるためのオフenseの最後は全てシュートであり、そこにハンドボールの面白さ、醍醐味がある。筆者は、大学4年間でポストというポジションに多く関わってきたが、日頃の練習でポストシュートを打つ中で、同じようなスローでシュートを打つとゴールキーパーに阻まれ、なかなかシュートが入らない時があり、スローのバリエーションを増やし、状況に応じてスローを変化させていくことでシュートの成功に繋がると考えた。そのため、試合の中で見られるシュート場面の中で、ポストシュートに着目し、より深く研究を進めていきたいと考えた。また、ポストシュートの体系というのはこれまで呈示されていなく、筆者が自らポストシュートの体系を呈示したいと考えた。

本研究の目的は、ポストシュートにおけるさまざまな投動作に着目して運動観察をおこない、それぞれの典型的なポストシュートの運動構造を運動モルフォロギ的に明らかにすることによって、ポストシュートを類型化していくことである。その方法として、マイネルの運動学における運動モルフォロギ的考察法を用い、印象分析を中心に進めていく。その際映像は、平成23年度全日本学生ハンドボール選手権大会の試合を使用し、その中でも、上位に進出した大学の試合の中で見られるポストシュートを観察対象とする。観察対象を学生にした理由として、学生は競技力として重要となる運動技能としての技術力や戦術力、技術や戦術を把握するための知識や理解力、運動において体を支えている体力が総合的に身に付いており、また、それぞれの大学独自のプレースタイルがゲームにおいて顕著に現れ、魅力を感じるからである。そして、マイネルの運動カテゴリーを用いて質的にそれぞれの徴表を把握していく。その後分析した結果を既存のシュートの体系を基に、ポストシュートの類型化を試みる。その際に、筆者の運動経験を踏まえて新たな視点から示唆を与え、今後の競技生活や指導の面に生かせるものにしてほしいと考える。

<本論>

第一章 ハンドボール競技の構造特性

近年数多くのスポーツがおこなわれているが、その中でハンドボールはボールゲームに分類される。ボールゲームとは、明確な達成目標をもち、途中経過がどうなるか定かでない競技形式によっておこなわれる運動遊戯の一類型である。ハンドボールについて研究を進めていくさいに、ボールゲームとしてのハンドボールを明らかにすることで、ハンドボールの特徴を浮き彫りにすることに繋がる。ハンドボールはチームスポーツ種目に属し、国際的な統ルールにしたがい2チームによっておこなわれ、ボールを手で相手チームのゴールに投げ入れ、自分のゴールを相手の攻撃から防御することにある。ハンドボールは多面的な身体能力が求められ、同様に技術的、運動的能力や精神的、道徳的能力も求められる。

第二章 ゲームの運動観察方法

本研究では、ゲームの運動観察方法として運動モルフォロギ的考察法を用いる。また手助けとなる手法として、自由観察法とフィルム、ビデオによる観察法を用いて考察していく。その際、他者観察の不可欠な前提条件となる印象分析をおこない、運動経過を間主

観的に捉え、運動共感できるようにする。また、マイネルによる8つの運動カテゴリーの中から「運動の局面構造」、「運動リズム」、「運動伝導」、「運動の先取り」を中心に運動構造を理解していく。マイネルが取り上げた8つの運動カテゴリーは、運動経過の本質を捉えるために必要なものであり、運動の理想像である正しい運動または上手な運動をおこなうために密接に関わっている。本研究では、ポストシュートの本質を見抜くために、マイネルの運動カテゴリーの中から特に4つのカテゴリーの徴表が際立っていると考えたため、4つのカテゴリーを中心に分析を進めた。また、モルフォロギ的運動分析はつかのまの印象のなかに隠されている事実や徴表や関係を確認させてくれるものであり、スポーツ運動を目を通して外から知覚してだけでなく、体験し、中から知覚することによって大きく補充され、拡大される。さらに、印象分析の際には、より間主観的な運動観察をおこなうために「共同観察」によって研究を進めた。

第三章 ポストシュートの類型化

この章では、平成23年度全日本学生ハンドボール選手権大会におけるポストシュートの場面を抽出し、それらの印象分析とその結果の考察をおこない、既存のシュートの体系を基に類型化を試みた。その結果ポストシュートの体系として、筆者の知識と経験を踏まえながらスローを分類することができた。それらが、以下に呈示したスローであり、大きく7つのスローに分類することができた。さらにショルダーズローを4つ、ジャンプ倒れ込みスローを2つに分類することができた。

- |               |                                 |
|---------------|---------------------------------|
| ・片手スロー        | ※ジャンプ動作を伴う発展スロー                 |
| (1) ショルダーズロー  | (3) ジャンプスロー (踏み切り脚: 左・右・両脚)     |
| ①ランニングスロー     |                                 |
| ②サイドハンドスロー    | (4) ジャンプサイドハンドスロー               |
| ③アンダーハンドスロー   | (5) ジャンプアンダーハンドスロー              |
| ④倒れ込みスロー      | (6) ジャンプ倒れ込みスロー (ダイビングスロー)      |
| (2) バックハンドスロー | ①利き腕方向へのダイビングスロー                |
|               | ②利き腕と逆方向へのダイビングスロー (オーバーヘッドスロー) |
| ・両手スロー        | (7) ツーハンズプッシュスロー                |

<結論>

本研究では、ポストシュートに着目しながら、運動経過を質的に観察し、考察していくことでポストシュートに見られるスローを類型化することができた。ポストシュートの構造体系を明らかにすることで、シュートに関する既存の体系をより細分化することができ、また、それをポストシュートに当てはめて、新たにポストシュートのスローのバリエーションについての体系を見出すことができた。今回ポストシュートについて類型化をおこなうにあたって、それぞれのスローの特徴や構造体系について述べることはできたが、ポストシュートをおこなうにあたって、構造体系を理解し、正しい運動を身に付けていくことが必要である。そこで求められるのが、マイネルが呈示した8つの運動カテゴリーであり、正しい運動をおこなうためには、それぞれの運動から徴表を見出し、本質を見抜いていかなければならない。ただ、見て真似できるというのではなく、スローをおこなうにあたって構造体系を把握し、繰り返し練習することで、自動化されることが求められる。より多くの引き出しを持ち、試合の中で落ち着いてシュートを選択できるようにすることで、ポストシュートの幅を広げ、シュートの成功に繋げることができる。

(引用・参考文献省略)